

昭和 45 年 12 月 1 日

横芝町の人口と世帯

< 10 月 30 日 現在 >

人 口	12,404 人
男	5,921 人
女	6,483 人
世 帯 数	2,917 戸



広報

横芝

発 行 所

山武郡横芝町横芝636番地
 横 芝 町 役 場
 電 話 04798-2-1111(代)
 郵 便 番 号 289-17

家屋の倒壊四十二戸を出した

季節はずれの豪雨

道路十六路線が不通



十一月十九日早朝から降り、大きな災害をもたらした。横芝町でも二八〇ミリ(両総用)の豪雨となつて本県各地に(水第二機場調べ)におよぶ豪

雨となつた。二十日鈍子気象台十時発令の大雷雨報は、有線で町内全域に報じられた。小、中学校は午前中で授業をうちきり、午後には臨時休校とした。雨はますますひどく、道路は水路と化してしまつた。まもなく大総地区の各所から崖くずれ、家屋の倒壊などの通報が入り被害はますます拡大の様相を呈してきた。このため町では急ぎ、災害対策本部を設置し消防団も召集して、統々と入る情報に基づいて協議、各所の被害状況を把握し復旧対策を練つた。坂田池周辺はみるみる一面の白海となり、長倉に通じる町道は、路肩もわからぬように増水して来た。二十日午後二時頃には殆んど通行不能なまでになつてしまつた。長倉から姥山に通じる道路は、両総用水サイホンの前後三ヶ所で崖くずれのため姥山には入れぬ状態となつてしまつた。姥山では、水まわしをしていた少女が裏山からく

ずれ落ちて来た土砂の下敷となり三時間余りもかかり部落民の懸命な救助作業により助け出されたが重傷を負うなど悲惨な事故もおこつた。県道横芝山武線から牛熊に入る田圃中の町道は角田方面から押寄せる水が滝のように流れ寸断寸前であつた。全戸が崖下に住居をかまえる牛熊地区などでは、各戸が崖くずれの危険にさらされて来た。また、取立の部落は三本の進入路が崖くずれのためにはぶさがれ陸の孤島となつてしまふなど道路網は県、町道の十六路線が不通となり、あちこちで立往生する車が見られた。小堤では新築して三年という瓦ぶきの住居三十二坪が裏山からくずれ落ちる土砂のために柱は中段からへし折られ全壊してしまつた。一方災害対策本部では被災地から入る被害の復旧対策の協議が続けられた。翌二十一日日本部長は被害者宅を見舞つた。道路、家屋の被害の大きかつた大総地区では

災害対策

議会協議会開催さる

今回発生した、大雨による災害対策について相談するため、議会全員協議会が開催された。協議会では、町長の挨拶につづいて、助役から災害発生以来の経過報告、平山産業常任委員長、総務、産業、建設各課長から被害状況等の報告が

あつた後、対策について検討された。その結果、復旧施策及びそれに伴う予算等については、更に、詳細に調査し、県とも相談の上、立案することとし、取敢えず急を要するものについては、町長の専決処分により措置するよう意見の一致がみられた。

被害概況

部落民総出の復旧作業が続けられた。また、町消防団や町内建設業者等の献身的な復旧援助は地元民の感謝の的となっている。災害は忘れたころにやってくる云うが過去に記憶のないこの豪雨はすでに十日たった今でもまだ生々しいつめあとを残し去つた。

農林開拓道路	山崖くずれ	道路決壊	耕地		建物		軽傷者	重傷者					
			冠水	流出埋没	冠水	流出埋没			住居				
									一部破損	浸床下	流出	半壊	全壊
半壊	全壊	半壊	全壊	流出	半壊	全壊							
四〇〃	二三一〃	七ヶ所	二〇〇〃	〇、五〃	八〇〇〃	二	八	二六〇〃	九	一八	一〇	一	一